

# 「うちに来た奴は、徹底的に守る」

北洋建設(株)

## 受刑者・非行少年雇用40余年 人生「預かる異色の建設業者」

小笠原 淳 おがさわら・じゅん

1968年小樽市生まれ。地方紙記者を経て05年からフリー。「北方ジャーナル」を中心に執筆。46歳

本多理人さん(仮名)は刑務所出所と同時に採用、2日後には初任仕事に就いていた(2014年11月10日午前、札幌市白石区の北洋建設資材センター)

「彼らがいないと成り立たない」と経営者が言えば、「このほかには行き場がなかった」と従業員が言う。札幌市東区の北洋建設(小澤輝真社長)は42年前の創業以来、刑務所を出所した人や非行に手を染めた少年たちの人生を預かり続けてきた。その数、延べにして300人以上。世の偏見をもとめせず彼らに手を延べ続ける若き社長は、今後その方針を変えない。「うちに来た奴らは、みんな家族だから」。

ら、絶対」

服役中の受刑者が、施設内で民間企業の面接試験を受ける……。言うまでもなく珍しい試みで、少なくとも札幌刑務所では前例がなかった。

昨年初めて北洋建設を含む2社が手を挙げ、両社ともに内定を出したが、1社については結果的に採用に到らず、北洋建設が最初の成功事例となった。

しかし、同社が出所者を受け入れたのはその時が初めてではない。法務省と厚生労働省が受刑者などの就労支援を本格的に始めたのは10年ほど前のことだが、北洋建設の取り組み

みは国の施策に30年以上先んじていた。これまで少なくとも300人以上の刑務所・少年院出身者を受け入れ、また今後もそれを続けるつもりでいる。

昨年4月に3代目社長に就いた小澤さんの口癖は「ガンガン行きますよ!」

道のりが平坦でないことは承知の上。これまでの40余年間が、すでに波瀾万丈だった。

### 創業社長急逝 18歳から現場修業

1973年、札幌市東区に看板を掲げた「小沢工務店」はアパートの1

室、6帖一間の小さな会社だった。当時30歳の小澤政洋さん(現社長の実父)は独立したばかりで人脈が乏しく、現場作業員の確保に骨を折ったといわれる。

「なんで元受刑者の人たちを雇うようになったのか、親父からは聞いたことないんですけど、たぶん人がいなくて苦肉の策で、っていうことだったと思うんですよ」

そう推測する現社長は、創業翌年の生まれ。その年の冬に工務店は株式会社に変更、資本金400万円で北洋建設は船出した。

のちの社長が物心ついたころ、家は戦場だったという。「従業員の喧嘩とか、すごいんですよ。一升壺バーンって割って、それで刺し合ったりするんですよ」

社長の母で現会長の小澤静江さん(67)も、その光景を憶えている。当時は「飯炊き」として会社を支えていた。毎朝4時から30人以上の食事を用意し、弁当も持たせる。夜には酔って暴れる男たちを命がけて諷めた。

「休みたい、病気で入院したい、つて何度も思いましたよ。階段から落ちて大怪我した社員のために救急車



小澤輝真社長自ら出所直後の本多さんを出迎え、自身の運転する車で社員寮に案内した(14年11月8日朝、札幌市東区の札幌刑務所)

### 札幌初出所前採用 「ガンガン行きます」

「どうも!」

「よろしくお願いします」  
同世代の男2人が、固い握手を交わす。背後には、厚い扉に囲まれた偉容の施設。

昨年11月8日、札幌刑務所。その朝、10カ月ほどの務めを終えて出所した本多理人さん(43)と仮名が小澤輝真さん(40)と顔を合わせるのは、2度めのことだった。扉の外で会ったのは、この時が初めてだ。

2週間ほど遡る10月22日、鳶・土工・解体業の北洋建設を営む小澤さんは刑務所を訪ねて採用面接に臨んだ。職員2人が立ち合う中、服役中の本多さんと約20分間やり取りし、「即戦力になる」と確信したという。職歴を問うと、鳶の手元(助手)の経験があり、解体の仕事にも1年以上の実績があるとわかった。その場で採用を決め、出所と同時に会社に迎え入れることを約束。窃盗などで前科3犯という履歴を心得てのことだ。「全然、ぜんぜん問題ない。そういう人のほうが頑張ってくれますか



「グラスぶつけられないんで、『献杯』ということ」

1月5日夜、若手社員らを誘って居酒屋に出かけた小澤社長は、静かに杯を傾けた。

昨年12月24日夜、社長はかけがえのない家族を喪った。かつて高校中退の新米役員を深夜に叩き起こし、夜明け前の資料センターで仕事のイロハを丁寧に教え続けてくれた多恵智成

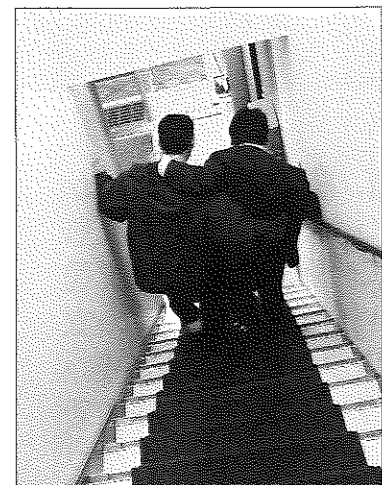
### 「毎日頑張るだけ」 聖夜の別れ乗り越え

「グラスぶつけられないんで、『献杯』ということ」

1月5日夜、若手社員らを誘って居酒屋に出かけた小澤社長は、静かに杯を傾けた。

「ぼくが13の時、彼が17でうちに来たんですよ。だから、北洋建設のことをよく知っています。一回辞めてほかに勤めたんだけど、その後また戻ってきた。15年ぐらいい前にうちの姉と結婚して、ぼくにとっては義理の兄でもあるんです」

喪失感は大きく、社に



従業員は会社を支え、会社は従業員を守る。小澤輝真さんにとって「普通のこと」だ(札幌市内)

「ぼくが13の時、彼が17でうちに来たんですよ。だから、北洋建設のことをよく知っています。一回辞めてほかに勤めたんだけど、その後また戻ってきた。15年ぐらいい前にうちの姉と結婚して、ぼくにとっては義理の兄でもあるんです」

喪失感は大きく、社に

「おたくにいた本多、今うちにいるんだわ。現場で会っても絶対に手出すなよ」

うちの社員は、何があってもうちが守る。社長にとっては、当たり前のことだった。

「社長、資格取らせて欲しいんです」

ガス溶断、足場作業、高所作業車、聴き終わらぬうち、78種の資格・免許を持つ同世代の社長は即答した。

「おお、全然いい。ガンガンとれ！」

初詣の願いごとのうち2つは、年内に叶いそう。残る1つ、「彼女」については、自力で探すことになるらしい。

中旬には上京し、3年前から籍を置く放送大学大学院に赴く予定だ。仕事の傍ら書き進めた修士論文A4判約100枚がほぼ完成しており、テーマは「職親、協力雇用主、更生保護における再犯等の考え方」。研究には先行例がなく、大学院の担当教授からは「君が日本の先駆者になれ」と励まされた。高校中退から24年、この春には修士の学位取得が叶う。

「いや、参りました。ほんとに参りました」

クリスマスイブのその晩、多恵専務は事務所前の雪かきをし、「少し休む」と社員に告げて社長室で横になった。

そして、そのまま二度と起き上がらなかつた。享年43。自身の難病の進行を見据えた社長が、社の将来を彼に託すつもりで決めた役員人事から、1年と経っていない。死因は循環器系の病気だったとされるが、発作などの兆しはまったくなかったという。コレステロール値が高く、煙草をよく喫う人ではあったが、本人を含めて誰も病気に気づくことができなかった。

「おたくにいた本多、今うちにいるんだわ。現場で会っても絶対に手出すなよ」

うちの社員は、何があってもうちが守る。社長にとっては、当たり前のことだった。

「彼女をつくりたい、です」

年が明けて1月5日夜、小澤社長との食事会を終えたのち社長の自宅に誘われ、グラス片手に語り合った。1時間ほどが過ぎたころ、切り出した。

「社長、資格取らせて欲しいんです」

ガス溶断、足場作業、高所作業車、聴き終わらぬうち、78種の資格・免許を持つ同世代の社長は即答した。

「おお、全然いい。ガンガンとれ！」

初詣の願いごとのうち2つは、年内に叶いそう。残る1つ、「彼女」については、自力で探すことになるらしい。



社屋はプレハブ建てで、隣接する社員寮よりも手狭。「これで充分」と社長は言う(札幌市東区)

「おたくにいた本多、今うちにいるんだわ。現場で会っても絶対に手出すなよ」

うちの社員は、何があってもうちが守る。社長にとっては、当たり前のことだった。

「おたくにいた本多、今うちにいるんだわ。現場で会っても絶対に手出すなよ」

うちの社員は、何があってもうちが守る。社長にとっては、当たり前のことだった。

「おたくにいた本多、今うちにいるんだわ。現場で会っても絶対に手出すなよ」

うちの社員は、何があってもうちが守る。社長にとっては、当たり前のことだった。

を受け、2年半を獄中で過ごすことになる。

38歳で出所し、塀の中で知り合った人の紹介で海を渡って青森県を訪ねた。同地で1年あまり解体工事の仕事をしたのが、建設業界とかかわった最初の経験だ。次いで、千葉県で高所作業を手がける業者に移り、ここで高所の助手を2年間勤めた。

そして再び「リセット」の必要に迫られる。

「暴力の多い会社だったのと、精神的なプレッシャーもありました。自分もだんだん視野が狭くなってきま

「おたくにいた本多、今うちにいるんだわ。現場で会っても絶対に手出すなよ」

うちの社員は、何があってもうちが守る。社長にとっては、当たり前のことだった。

「おたくにいた本多、今うちにいるんだわ。現場で会っても絶対に手出すなよ」

うちの社員は、何があってもうちが守る。社長にとっては、当たり前のことだった。

「おたくにいた本多、今うちにいるんだわ。現場で会っても絶対に手出すなよ」

うちの社員は、何があってもうちが守る。社長にとっては、当たり前のことだった。